

今年のテクニカルセッションは、Billinghurst 博士の HIT Lab の研究紹介、Wohn 教授による KAIST の VR 研究紹介、広瀬茂男教授のロボット研究紹介が当初の招待講演であり、大変素晴らしい講演者を集めることができたと考えている。この他にも招待講演を依頼していたのだが、どうしても調整がつかず、最後には企画側で講演を用意することとした。つまり、館教授、廣瀬教授、中津博士のパネル講演であり、佐藤誠教授、竹村治雄教授、池井による (Stone 教授の) 代打講演である。一般セッションは、Visual Display, Algorithm, Human factors, Haptics, Augmented Reality/Mixed Reality, Wearable/Outdoor, Application の7セッション、22 件のペーパーと、7 件のポスター講演から構成されることとなった。例年通り、品質の高い論文ばかりであり、VR の最先端研究の発表の場として、会員諸氏にもっと参加されることをお勧めしたい。

最終日のテクニカルツアーには、東大の中村・岡田研、石川・橋本研、土肥研、館・前田・川上研、廣瀬・広田研のご協力を得て、東大での VR 関連研究を見学できるように設定された。個々の内容は素晴らしいものであったが、それぞれの研究室が分散していたために、特に外国人参加者に案内が不足だった点は反省点かもしれない。

Best Paper Award は、表彰委員会を組織して、査読時に評価の高かった論文を5人の審査員が全て事前に読み、厳正な評価を行なって決定し、バンケットの際に贈呈した。受賞論文タイトルは、Focused Ultrasound for Tactile Feeling Display(T. Iwamoto, T. Maeda, H. Shinoda)であり、他の優秀な論文共々、ICAT のホームページで読むことができる。

今年の論文募集とその査読は、WEB を最大限に活用することにより、従来に比べて投稿者、査読者の負担を軽減することが可能となった。とは言え、これらの環境を実現し、またコンタクトのメール、情報の送付などの膨大な手作業があってそれが実現したわけである。この作業は、広田光一助教授、稲見昌彦博士、橋本渉博士、長谷川昌一助手らの献身的な努力によって行われたことを記して、末筆ながら、深く感謝致したいと思う。

◆会場担当より

稲見昌彦

Executive Committee

今年度の ICAT は VR 学会では6月の人工現実感研究会でおなじみの東京大学山上会館にて開催された。会場に関してはご存じの学会員の方も多と思われるので別の観点から会場の紹介を行いたい。

事前の周知は徹底していなかったものの今回の山上会館での新しい目玉の一つは無線 LAN のサービスである。無線 LAN は最近 JR の駅やファーストフード等の公共的な場所でも試験的に取り入れられ始めており、ノートパソコンと無線 LAN カードさえ用意しておけばケーブル等の引き回しに煩わされることなく高速な通信環境を確保可能となる。

では学会会場と LAN 環境との相性はいかほどのものであろうか? 多忙な参加者の内職が楽になるだけであらうか?

興味深い事例として、日本ソフトウェア科学会の「インタラクティブシステムとソフトウェア研究会」でのチャットシステムを紹介させていただきたい。参加者は HUB 持参で来場し、事前に会場中にネットワークケーブルを張り巡らし即席の LAN を構築する。ではその LAN を用いて何をするか。参加者は発表の最中にプレゼンテーションとは別のスクリーンにて立ち上がっているチャットにて質問やコメントを発言するのである。座長はその発言を要約し、質問時間に質問を行うことになる。手慣れた発表者の場合はコメントを見ながら発表をインタラクティブに修正することも可能である。また発表中に共同研究者により補足が付くことや、専門用語に対する解説が付くこともある。チャットのログは参加者全員が参照することが出来、発表者は発表終了後に自己へのフィードバックとして利用することが出来る。しかしながらこのシステムはある程度バックグラウンドの近い組織内で稼働させないと不要な摩擦か長い沈黙の支配下に入る可能性もある。

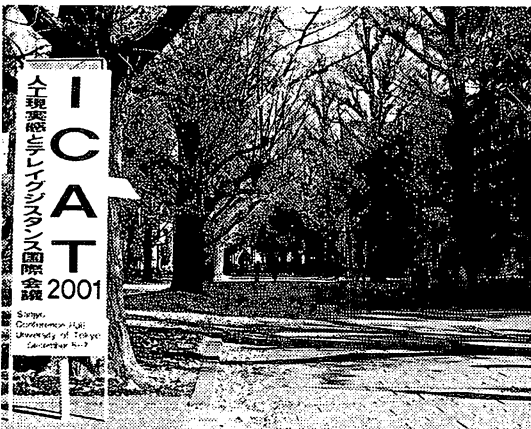
大規模な学会会場での LAN 導入事例としては SIG-GRAPH2001 での無線 LAN 環境が挙げられる。このシステムの場合は質問事項を座長宛に投稿するといった形での活用がなされていた。

今回 ICAT ではチャットとメールの間くらいの位置づけとして掲示板システムを導入した。国際会議において

日本人参加者は英語での質問がどうしてもできず、疑問点を持ちつつもそのままですませてしまうケースが多く見受けられる。文章であるならある程度はその閾値が減るのでは？という期待から導入が決まった。

本システムは東工大佐藤研究室の長谷川助手により開発され、参加者は ICAT の Web ページのプログラムから各ペーパーに関する掲示板にアクセスが出来、コメントや質問が付けられるようになっている。残念ながら今回は周知が足りなかったためほとんど稼働していなかったようではある。しかしながら本試みはコンピュータ技術により実世界での営みである学会を増強する Augmented Reality ならぬ Augmented Conference の可能性を感じさせるものであると信じている。

今後は発表者が発表時にネットワークを利用したデモをリアルタイムに行うといった光景も見られるようになるかもしれない。



会場となった東大本郷キャンパスの銀杏並木

◆プロシーディング担当より

橋本渉

Executive Committee

今回のプロシーディング作成では、原稿管理や著者への連絡を Web を介して電子的におこなうという徹底したものでした。この優れた Web システムのおかげで、担当に残された仕事は、原稿のスタイル準備、予稿集の目次やファイナルプログラムの作成といった作業に集約されました。

目次を完成するには最低でもプログラムが確定し、その予稿ページ数を把握することが必要です。しかし原稿回収等の遅延によって完成が予定より遅れてしまい、印

刷業者との窓口であった VR 学会事務局のスタッフの方々にはなにかとご迷惑をおかけしました。結果として 220 ページをこえる予稿集が完成し、ほっとしております。

◆ Web 担当より

長谷川晶一

Executive Committee

これまで C++ での VR やロボット制御プログラムの製作は経験していましたが、Web プログラミングはしたことがなく、以前から今流行の Web システムに興味を感じておりました。ちょうどそこに ICAT2001 の運営委員の話が舞い込んできましたので、自然と Web ページを担当させていただくことになりました。

今回、投稿、査読、参加登録、会議のプログラムと論文・ビデオの公開を電子化しましたが、結果として全体が統合された Web システムが完成したと自負しております。ただ、既存の Web システムを調査せずに What you see is what we get なシステムにしたため、本当に届いているのか不安を感じた方が多かったようです。また、製作しながらの公開となったため、ご不便をおかけしたことをお詫びいたします。不具合の指摘などにご協力いただきありがとうございました。

今回の Web システムは CD-ROM プロシーディングの作成の時にも威力を発揮しました。ICAT の CD-ROM をごらんになった方はお気づきと思いますが、今回の CD-ROM は Web ページをダウンロードしたものになっています。

今回分かったことのもうひとつは、Web システムは Web を使わない通常のアプリケーションソフトより面倒で不便だということです。参加費の管理などは VR 学会事務局にお願いし、データベースソフトを用いて行いましたが、Web システムでこれを代替すると開発が大変な上に不便になったと考えられます。今回は上手に使い分けができたと思います。

せっかく作ったソフトウェアですので、今後活用できるよう、今回作成したプログラムのソースを、<http://sklab-www.pi.titech.ac.jp/~hase/soft/ICATPHP/ICATPHP.html> に置きました。次にお鉢が回ってきた方にご活用いただ